

公立図書館における情報リテラシー支援と地域資料のデジタル化

図書館笑顔プロジェクト(長谷川豊祐, 福島雅孝, 畠山珠美, 井出浩之, 松島茂, 上田直人)

はじめに

メディアが電子化し、パソコンやインターネットが各家庭・個人に普及している。Webによる情報発信・入手が一般的になり、住民のICTスキルも向上している。こうしたインターネットに代表される変化に、社会は大きく構造転換しているが、図書館サービスはどこまで対応できているのだろうか。

本プロジェクト(漆原宏写真集『ぼくは、図書館がすき』(JLA 2013)の編集協力をきっかけとして、「ユーザーと業界が元気になる」を目標に、2016年秋から活動開始)では、調査する住民の立場から、未来の図書館を概観し、次に、自宅からのDB利用の必要性を述べた¹⁾-²⁾。これは、地域における館種を超えた連携³⁾を発展させたものである。

今回は、インターネット後の公立図書館における重点サービスとして、情報リテラシー支援と、地域資料のデジタル化を取りあげる。2つの図書館サービスを提供する際、明らかにすべき事項は、サービスの構築、内容、対象、需要、提供方法、図書館員や自治体職員の意識改革などが考えられる(本日で取り上げることができない事項については、後日の論文でまとめたい)。

1. 調査する住民

最初に、「調査」とは何か、「調査する住民」とは誰かを改めて考える。

1) 「調査する」とは何か

調査とは、「ある事柄を明確にするためにしらべること」⁴⁾、「物事の実態・動向などを明確にするために調べること」⁵⁾、「ある事柄の実態・事実関係などをはっきりさせるために調べること」⁶⁾である。調査とは、事柄や物事について、実態、動向、事実関係をはっきりさせることといえる。

例えば、今日は嬉しいことがあったので、夕食は外食にしようかと決定し、どんなお店が良いかをググって複数候補をピックアップして、お店の公式サイトやグルメサイトを参照して、メニューや値段を比較・評価・選択し、お店までの交通経路や所要時間をスケジュールし、同伴

者に連絡する。この一連の流れも立派な調査といえる。

2) 「調査する住民」とは何か

住民生活におけるこうした調査は、学術的な調査・研究と一線を期するものの、教育・研究機関の研究者や在野研究者などによる調査、そして、図書館利用者の図書館を通しての調査要求と同様に、広義の調査であり、調査の有用性・動機・目的も明確である。

『独学大全』⁷⁾は、異例のヒットとなっているが⁸⁾、本文中の41か所で言及される知的営為、その行為者には調査する住民も含まれると考えられる。また、書誌への言及は、調査を仕事とする図書館員的には大いに納得できる。

知的営為を分類し無用の垣根と階梯を設けることは、益よりも害が多い・・・「学習」と「研究」を別物だと分断するより、同じ知的営為という連続体の一部としてみなした方が得られるものは大きい。(Kindle 位置 No376/7408)

極言すれば、書誌なしに知的営為を続けることは、誰かに準備してもらった教材を与えられることを含めて、独学に必要な学習資源との出会いを、ひいては独学の成否そのものを、〈偶然〉に依存すること、運任せにすることに他ならない。(Kindle 位置 No2119/7408)

2. 情報リテラシー支援

図書館の所蔵資料は、以下の通り、あらゆる調査に対応可能な質と量を、個々の図書館の総体として備えている^{9 p.1)}。

公共図書館はあらゆる人に開かれた、地域の中で最も良く利用される公共施設の一つであり、その所蔵資料は、人類の知のあらゆる領域に及んでおり、暮らしやすく、元気なまちづくりが求められる中で、公共図書館は、その施設と資料の一層の活用により、読書推進という役割に加えて、住民の生活や地域の産業に役立つサービスを提供するなど、さまざまなやり方でまちづくりに貢献することが期待されている。

総体としての蔵書を住民が利用するためには、課題を設定し、求める資料を効率的に探し出して入手するためには、図書館やインターネットでの、適切な手段や仕組みが必要となる。そこで、情報リテラシーの出番となる。

1) 情報リテラシーとは

情報リテラシーは以下のように、情報技術を使いこなす能力と、情報を読み解き活用する能力と、2つに分けて定義される¹⁰⁾。

文字を読み書きする能力を意味するリテラシーLiteracy から派生し、「情報技術を使いこなす能力」と「情報を読み解き活用する能力」の二つの意味をもつ。「情報技術を使いこなす能力」(アンダーラインは筆者)とは、コンピュータや各種のアプリケーション・ソフト(特定の作業のためのソフトウェア)、コンピュータ・ネットワークなどのIT(情報技術)を利用して、データを作成、整理したり、インターネットでさまざまな情報を検索したり、プログラムを組むことのできる能力をさす。コンピュータ・リテラシーとよばれることもあり、ITの分野で情報リテラシーという場合は、こちらを意味していることが多い。一方の「情報を読み解き活用する能力」(アンダーラインは筆者)は、広義の情報リテラシーと位置づけられる。テレビ、ラジオ、新聞、雑誌などさまざまなメディアから発信される情報の役割や特性、影響力などを理解する力、および自ら情報を収集、評価、整理し、表現、発信する能力など、情報の取扱いに関するさまざまな知識と能力のことをさし、メディアリテラシーともよばれる。学校教育の現場などでは、おもにこの意味で使われる。

高校に教科として「情報」が入った2003年には3科目だった。コンピュータの基礎技能と情報活用の実践力に重点を置いた「情報A」、情報の科学的理解と機能や仕組みに重点をおいた「情報B」、情報社会に参画する態度を育てることに重点をおいた「情報C」である¹¹⁾。現在は「社会と情報」と「情報の科学」の2科目となっている¹²⁾。2つの科目と2つの定義がペアになっている。

高校生が学んでいる内容について、高校生との理解の程度に差があるとしても、年齢に関係

なく、一般住民も図書館員も了解しているべきだろう。特に、住民と行政職員の情報リテラシーを支援し、インストラクターともなる図書館員は、現時点では職務として存在していなくとも、今後の需要を先読みして、職場としても、情報のプロを目指す図書館員としても、早急な対処が必要である。住民要求とのギャップが取り返しのつかないほど大きくなれば、図書館が住民や行政や社会から見放されるだろう。

2) 情報リテラシー関連図書

一般人・学生向けから図書館員向けまで、情報リテラシー関連図書は数えきれない。最近購入したものを数点あげる。課題設定やアウトプットには、論文作法や情報発信技術¹³⁾⁻¹⁵⁾、資料を効率的に探して入手するには情報探索法¹⁶⁾⁻¹⁷⁾に習熟するのが良いだろう。

3. 地域資料のデジタル化

前の章で引用した「住民の生活や地域の産業に役立つサービスを提供する」^{18 p.1)}からも、従来からのサービスとしても、地方創生や地域活性化などの文脈でも、地域資料の収集、提供、デジタル化の重要性は、ますます大きくなっていく。

1) 地域資料とは

地域資料は、図書館法でも郷土資料と地方行政資料とあるが、その2つを包含し、以下のように定義される¹⁹⁾。

郷土資料は、図書館資料の種類の一つで、図書館の所在する地域や自治体に関する資料。以前は、郷土史に関する資料とみなされた。地域資料ともいう。現在の公共図書館は、その地域についての資料を責任を持って収集することが業務の一つとして位置付けられており、それらのレファレンス質問に答えることも重要な業務となっている。収集対象地域には、近隣や県下を含めることもある。内容的には、郷土に関係した資料という場合と、郷土人や出身者による著書や郷土での出版物、さらに古文書や出土品などまで含める場合がある。また、行政資料を、郷土資料の一部とする場合と別に扱う場合とがある。

行政資料は、政府機関や地方自治体およびその類縁機関、国際機関が刊行した資

料。各機関の資料に基づいて作成された民間の出版物を含めることもある。一般に行政資料という捉え方は、公共図書館が当該自治体の資料を収集、提供、保存するときに用いられる。独立したコレクションである場合と郷土資料の一部となる場合とがある。

地域資料に関する収集の状況・方針・整理・所蔵の調査には、全国公共図書館協議会による「公立図書館における地域資料サービスに関する実態調査報告書」(2018)などがあり、サービス状況を把握できる^{20 p.41-66}。デジタル化について、デジタル化の方法、目的、課題、対象資料が簡潔にまとめられている^{21 p.233-235}。

2) デジタル化とは何か

デジタル化において、図書館員は監修者としての役割に軸足を移し、住民と連携して、住民の力を活用し、住民の創ったコンテンツやものを収集・保存・発信し、その利用・活用も支援する。利用者が利用しやすい仕組みとしてのプラットフォームには、サービスプロバイダーや機関リポジトリ、民間システムのADEAC²²、NDLのジャパンサーチ²³などがある。図書館は、地域にある広義のコンテンツプロバイダーや、地域の大学の先行システムも統合して、先行研究²⁴⁻³³を参考にシステムを構築し、地域の事業全体に責任をもつこともできる。

4. 重点サービスの提案

情報リテラシー支援については、発表者の授業シラバス「図書館情報学」、「図書館情報技術論」の2件と、地域資料のデジタル化については、個人的経験から具体例を示す。

1) 情報リテラシー支援

以下のシラバス内容の修得で、住民自身によるセルフレファレンス^{34 p.19-24}と、図書館員のインストラクター化をゴールとしたい。演習課題として学術論文の探索、入手、抄録作成(2回、講評をつけて返却)を課している。

1-1) 「図書館情報学」のシラバス

授業の目標

a) 社会生活における課題発見とその解決のために、情報を正しく理解して活用する能力を身につける。

b) 情報活用能力を身につけるために、情報メディアと、情報の組織的な提供機関である図書館の基礎的な事項について、その特徴や仕組みを知る。
c) 情報の収集・加工・発信の基礎的な演習により、情報メディアと図書館を活用するための理解を深める。

各回の内容と目標

1) 実践的ツールとしての「図書館・情報学」

目標：「図書館・情報学」の有効性を理解する。Q 図書館の活用, Q 学術論文とは

2) メディアを組織化して利用者に提供する仕組みとしての「図書館」

目標：メディアを組織化して利用者に提供する「図書館」の仕組みを知る。図書館の仕組みや特徴を理解することによって、有効に図書館を活用できるようになる。Q 図書館の機能, Q 貸出冊数の意味

3) 情報を蓄積し伝達する図書、雑誌、インターネットなどの「情報メディア」

目標：情報を蓄積し伝達する図書、雑誌、インターネットなどの図書館で提供される各種の「情報メディア」の特徴を理解することによって、有効に学術情報を活用できるようになる。Q メディア比較, Q 蔵書構成

4) 情報メディアの収集、提供、保管を行うための「資料組織」

目標：図書館で提供している情報メディアを効果的に活用するために、図書館資料へのアクセス方法の仕組みを理解する。図書館資料の組織化について理解することによって、学術情報をより効果的に活用できるようになる。Q 分類の仕組み, Q 総合目録の仕組み

5) データベースやインターネットで情報を探索・入手するための「情報検索」

目標：情報へのアクセス方法の技術と、情報の入手方法について理解する。情報検索の具体例を知ることによって、課題探索を効果的に行うことができるようになる。Q ツールの比較, Q 文献の入手と要約

6) 社会人に必要なコミュニケーション技術としての「情報発信」

目標：課題を発見し、情報を入手し、情報を効果的に発信する方法について理解する。
Q 引用の方法, Q 著作権の解釈

1-2)「図書館情報技術論」のシラバス

授業の目標

- 1) 図書館業務に必要とされる情報技術の理解
図書館の種類と機能とは
図書館で使われている情報技術とは
- 2) サービスと管理運営への活用を説明できる
サービスと管理運営とは
- 3) 情報技術の展開と課題に対応できる
変容する図書館の役割：情報拠点
まちづくり、生涯学習、地方自治、情報社会
- 4) 図書館とインターネットの活用に習熟する
自分にも活用可能な情報[通信]技術
情報の獲得と発信、情報化社会へ上手な対応

各回の内容

- 01 情報技術と図書館
- 02 コンピュータとネットワークの基礎
- 03-04 図書館における情報技術活用の現状
- 05 インターネットによる情報発信
- 06 電子資料とデジタル化
- 07 情報検索とデータベース
- 08-10 図書館業務システム
- 11 コンピュータシステムの管理
- 12-13 最新の情報技術と図書館

2) 地域資料のデジタル化

近所で親しく付き合っている高齢の方から、戦争前後の学制や、学徒動員と故郷まで戻る旧友との道中、新制大学への入学、小学校の教員になるまでの経緯など、当時の学生時代や生活の昔話を聞いた。そこで、当時の詳細を知りたくなり調査を開始した。「福島の学徒勤労動員の全て」³⁵⁾を、ある企業のサイトで全文が公開されているのをみつけた。福島県内の図書館は、紙媒体の図書を福島県立図書館(地域書庫/持出禁止)などの6館が所蔵していたが、公開されているPDFの全文へのリンクなどは見当たらなかった。プリントアウトして差し上げると、回想法ではないが、その方へのインタビューも載っていて、当時を思い浮かべる良い資料になった。本のもつ力である。地域資料のデジタル化の有効性を示す一例である。

デジタル化されると有用な地域の歴史の例もある。地域講座で講師をされる方の著書「辻堂歴史物語」³⁶⁾は、藤沢市だけに所蔵される地域資料である。デジタル化できれば地域に関して、全分野の貴重な情報源となる。

本プロジェクト結成のきっかけとなった「ぼくは、図書館がすき：漆原宏写真集」³⁷⁾⁻³⁸⁾や、以前の写真集³⁹⁾のデジタル化は、図書館内の光景が当時の記録となり、これも有用な地域資料といえる。肖像権や、公開の方法・システム、利用制限、データ保存などの検討事項は多いが、小さな地域資料のデジタル化として、本プロジェクトで対応を検討している。

3) 利用要求、実装、課題

本日は時間の関係で言及しない

参考資料

- 1) 図書館笑顔プロジェクト. 未来の図書館：調査する住民の立場から. 図書館評論. 2019, no. 60, p. 54-75. <http://toyohiro.org/hasegawa/TheFutureLibrary.pdf>
- 2) 図書館笑顔プロジェクト. 公立図書館におけるリモートアクセスでの商用DB提供の展望. 図書館評論. 2020, no. 61, p. 3-21. http://toyohiro.org/hasegawa/20200208tmk_hasegawaDB.pdf
- 3) 長谷川豊祐. 神奈川県内の図書館における館種を超えた連携：神奈川県内大学図書館相互協力協議会の発足から神奈川県図書館協会への統合まで. 図書館評論. 2018, no. 59, p. 55-68. <http://toyohiro.org/pub.htm>
- 4) 日本国語大辞典. JapanKnowledge
- 5) デジタル大辞泉. JapanKnowledge
- 6) 講談社カラー版日本国語大辞典. 1990, p. 1279.
- 7) 読書猿. 独学大全：絶対に「学ぶこと」をあきらめたくない人のための55の技法. ダイヤモンド社, 2020, 788p.
- 8) 【山口周×『独学大全』】残念な「勉強法ホッパー」と「独学を武器にできる人」の決定的な差 <https://diamond.jp/articles/-/260056?display=b> 発売2ヵ月半で10万部を突破。分厚い788ページ、価格は税込3000円超。
- 9) 国立国会図書館. 地域活性化志向の公共図書館における経営に関する調査研究(図書館調査研究レポート15). 国立国会図書館関西館 図書館協力課, 2014, 232p.
- 10) 日本大百科全書(ニッポニカ), JapanKnowledge

- 11) 長谷川豊祐. 情報リテラシーと大学図書館 (特集:レファレンス・サービス--利用者との関係から考える). 現代の図書館. 2003, 41 (3), p.163-173. <http://toyohiro.org/hasegawa/literacymod.pdf>
- 12) 実教出版 情報 令和3年度用教科書 https://www.jikkyo.co.jp/highschool_r03/jouhou/textbook/r03/
- 13) 小笠原喜康;片岡則夫. 中高生からの論文入門(講談社現代新書). 講談社, 2019, 224p.
- 14) 小笠原喜康. 最新版 大学生のためのレポート・論文術(講談社現代新書). 講談社, 2018, 240p.
- 15) 上野千鶴子. 情報生産者になる(ちくま新書). 筑摩書房, 2018, 381p.
- 16) 関裕司. インターネット最強の検索術. リブロス, 2000, 255p.
- 17) 入矢玲子. プロ司書の検索術:「本当に欲しかった情報」のを見つけ方ほか. 日外アソシエーツ, 2020, 241p.
- 18) 前出9)
- 19) 図書館情報学用語辞典 第5版 Japan Knowledge
- 20) 蛭田廣一. 地域資料サービスの実践(JLA 図書館実践シリーズ41). 日本図書館協会, 2019, 257p.
- 21) 前出17)
- 22) <https://trc-adeac.trc.co.jp/>
- 23) <https://jpsearch.go.jp/>
- 24) 森田歌子. 図書館の情報・資料のデジタル化がアナログの世界を変えた! 地域コミュニティができ, 人間のつながりが広がる 秋田県立図書館で実現に力を注いだ副主幹山崎博樹氏の実践法に学ぶ. 情報管理. 2009, 52(6), p.368-369. https://www.jstage.jst.go.jp/article/johokanri/52/6/52_6_368/_article/-char/ja/
- 25) 長塚隆. 地域資料のデジタル化の進展をNDL SearchやJapan Searchなどの検索ポータルから推測. 情報知識学会誌. 2019, 29(4), p.340-343. https://www.jstage.jst.go.jp/article/jsik/29/4/29_2019_049/_article/-char/ja/
- 26) 長塚隆. 自治体史等の地域資料のデジタル化・オープン化の進展状況:神奈川県政令指定都市の事例から. 情報知識学会誌. 2020, 30(2), p.155-162. <https://ci.nii.ac.jp/naid/130007865521>
- 27) 是住久美子. 図書館を拠点とした地域資料の編集とデジタルアーカイブの発信. 図書館界, 2020, 72(4), p.184-188.
- 28) 嶋田学. 《基調講演》公共図書館における地域資料に関わるサービスの意義と今後の方向性について—瀬戸内市立図書館での実践事例をもとに—. 図書館界. 2020, 71(6), p.313-316
- 29) 相宗大督. 《報告1》まちについての思い出を, 図書館で残すプロジェクト—大阪市立図書館における「思い出のこし」事業の実例をもとに. 図書館界. 2020, 71(6), p.316-320.
- 30) 森谷芳浩. 《報告2》関係機関との連携による神奈川県行政資料アーカイブの構築と運営について. 図書館界. 2020, 71(6), p.320-325.
- 31) 野口環. 《報告3》『タオルびと』制作プロジェクト:地域産業資料に関する情報の収集と発信. 図書館界. 2020, 71(6), p.325-330.
- 32) 青木和人. 《報告4》図書館における地域資料の新たな用方法としてのウィキペディア・タウン:事業の意義と現状, 今後の展開について. 図書館界. 2020, 71(6), p.330-335.
- 33) 《討議》公共図書館における地域資料に関わるサービスの意義と今後の展望. 図書館界. 2020, 71(6), p.335-347.
- 34) 斎藤文男;藤村せつ子. 実践型レファレンス・サービス入門. 補訂第2版(JLA 図書館実践シリーズ1). 日本図書館協会, 2019, 203p.
- 35) 福島の学徒勤労働員を記録する会. 福島の学徒勤労働員の全て. 福島の学徒勤労働員を記録する会[代表 大内寛隆], 2010, 367p. <https://fyk.jp/web/htdocs/gakuto/gakutoindex.htm>
- 36) 辻堂歴史物語:湘南の風薫るわがふるさと. 2013, 286p.
- 37) 漆原宏. ぼくは、図書館がすき:漆原宏写真集. 日本図書館協会, 2013, 87p.
- 38) 漆原宏. ぼくは、やっぱり図書館がすき:漆原宏写真集. 日本図書館協会, 2017, 95p.
- 39) 漆原宏. 地域に育つくらしの中の図書館:漆原宏写真集. ほるぷ, 1983, 111p.